

南方熊楠と『ネイチャー』 ——「東洋の星座」掲載をめぐって——

志村 真 幸

はじめに

南方熊楠は一八九三年一〇月五日号の「東洋の星座」で『ネイチャー』にデビューし、以後、一九一四年までに計五一篇の論文が掲載されることになる。一九二五年に書かれた矢吹義夫宛書簡、いわゆる「履歴書」で熊楠自身は「其時丁度ネーチュール（御承知通り英国で第一の週刊科学雑誌）に天文学上の問題を出せし者ありしが誰も答ふるものなかりしを小生一見して下宿の老婆に字書一冊を借る、極めて損じた本でAからQ迄有てRよりZ迄全く欠けたり、小生その字書を手にし答文を草し編輯人に送りしに忽ちネーチュールに掲載されてタイムス以下諸新紙に批評出で大に名を挙げ」と自慢げに語り、「南方植物学研究所設立趣意書」では天文学の懸賞論文で一等をとったことにまでなる。実際には『タイムズ』に批評は出ていない⁽¹⁾し、懸賞論文だったわけでもない。もちろん『ネイチャー』に掲載されたことはおおいに評価されるべきであるが、一八九三年の段階では、たしかに世界的に有名な雑誌ではあったものの、現在のように一流の科学者たちによ

る最先端の論文ばかりが掲載されているわけではなかった。査読制度もまだ採用されておらず、掲載される論文にも専門の科学者とアマチュアによるものとが混在していた。一方で、熊楠の論文が掲載されたのが「読者投稿欄」とされたことで、近年では逆に過小評価される向きもあった。では、この欄の性格は実際にはどのようなものだったのか。熊楠の『ネイチャー』掲載論文を正しく評価するには、当時の誌面の分析が必要となる。

本稿では、「東洋の星座」が掲載された『ネイチャー』第四八巻の全体を見渡すことで、当時の『ネイチャー』がどのような雑誌だったのかを示し、そのうえで熊楠の投稿の位置づけを試みる。さらに、筆者がこれまで主として扱ってきた『N&Q』誌、およびそちらに掲載された熊楠の論文との比較も合わせて行うこととする⁽²⁾。

『ネイチャー』と熊楠

『ネイチャー』の創刊は一八六九年十一月四日のことであり、これ

は科学誌のなかではけっして早いものではない。イギリスの初期の科学誌といえ、王立協会の『トランザクシヨンス』（一六六五年創刊）があるが、基本的には協会のメンバーによってのみ執筆され、読まれたものであった。しかし、一九世紀中葉から一般読者をも対象とし、購読料によって支えられる科学誌が出現する。いわゆるポピュラー・サイエンスの流れにあるもので、新興のミドルクラスが購読層の中心をなした⁽³⁾。彼らにとって科学は、歴史、文学、芸術などと並んで身につけるべき教養のひとつであり、わかりやすく噛み砕いて教えてくれる入門的な雑誌が必要だったのである。ただし、『ネイチャー』は一般読者への啓蒙とともに、最先端の科学誌という側面も備えることを目指しており、その象徴が投稿欄（これが近年は読者投稿欄とされた箇所である）であった。

創刊者のノーマン・ロッキヤーはウォリックシャーのラグビー出身で、大学等の学歴はないものの、陸軍省に事務官として勤務のかたわら、アマチュアの天文学者として名をあげ、一八六九年に『ネイチャー』を立ち上げると、一八七一年にケンブリッジ大学講師、一八八五年にケンジントン太陽物理天文台所長となり、やがてはイギリス科学振興協会会長や王立協会副会長を務めるまでにのぼりつめた。一九世紀イギリスに典型的な、アマチュア出身の成功した科学者といえる。天文学者としては、太陽観測に業績が多く、ヘリウムの存在を予言、命名したことで知られる。一方で、古代エジプトの天文学を扱った『天文学の曙』（一八九四年）のような文化史的な研究もある。ロッキヤーは亡くなる前年の一九一九年まで約五〇年間にわたって『ネイチャー』

の編集指揮をとりつづけ、その影響は誌面に色濃くあらわれていた。熊楠はロッキヤーと面識があり、大英博物館を追放された際には取りなしを頼みに行っている。しかし、すげなく断られたようで、のちに書簡で「ロッキヤーは小生も会いしことあるが、実に倨傲無比の老爺なり」（上松翁宛、一九一九年九月三日付）とくさしている。

熊楠が初めて『ネイチャー』を手にとった時期は定かでない。南方熊楠顕彰館に残されている『ネイチャー』は、一八八八年八月一六日号がもつとも古く、これをふくめ一八八八年のものが三冊、一八八九年のが九冊、一八九〇年のが一八冊ある。アメリカのアナーバー時代に、『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』などとともに購入して読んでいたようで、日記にもくりかえし言及がみられる。日本へ帰国後も、若干の中断はあるものの、一九三三年末に購読を停止するまで約四五年間も読みつづけた。なお、熊楠のもとに届いた最終の一九三三年一月二一日号にも、彙報欄に出たJ・A・マカロック『中世の信仰と寓話』の紹介への書き込みが残されており、最後まで目を通していたことがわかる。

『ネイチャー』第四八巻

本稿で扱う『ネイチャー』第四八巻は、一八九三年五月から一〇月までの半年間、五月四日号から一〇月二六日号までの計二六週分を収めるものである。当時のイギリスの週刊誌は、一一〜四月、五〜一〇月の二期制をとるものが多く、半年ごとに一卷（あるいは一集。英語

ではヴォリユームないしシリーズ)としてまとめられ、索引や総目次も作成された(年二回刊の雑誌も五月と十一月に発刊されるケースが目につく)。ノンブルも五月四日号が一〜二四頁、翌週の五月一日号は二五頁から始まって四八頁までというように半年間積み重ねられていき、第四九巻に入った十一月二日号で一頁に戻る。なお、『ネイチャー』の表紙として有名な地球の図とワーズワースからの引用は、五月と十一月の第一週の号にしか入らない。ちなみに、『ネイチャー』は日付けどおりの日に発行されていたようである。

各号は原則として全二四頁で構成されるが、増頁号もあり、第四八巻は全六三二頁(+索引が四〇頁)となっている。基本的な誌面構成は毎号変わらず、以下のようなになる(図1を参照)。^①科学諸分野の入門的な書籍を取り上げて紹介する文章(通常計二篇。依頼原稿と編集部によるものが混在)、^②書評(Our Book Shelf、編集部によるものが多いが、依頼原稿や投稿もある)、^③投稿欄(Letters to the Editor)、^④彙報欄(雑報、学会近況など)。^④はさらに細分でき、A・研究報告、短信、国内外の学会での発表の紹介、B・ノート(新聞や雑誌の記事の紹介、人事、公開レクチャーなど)、C・天文学コラム、D・地理学ノート、E・大学および研究機関人事ほか、F・科学誌、G・協会と学会、H・寄贈された書籍、パンフレット、雑誌、I・各協会の日ごよみとなる。このうちBCGHについては毎号欠かさずあるが、他の項目はない週もある。順番が入れ替わったり、名称が微妙に異なることもある。基本的に^④は編集部による記事となるが、Aなどに署名記事がふくまれることがある。この署名記事(イニシャルのみのも

CONTENTS.		PAGE
An American Text-book of Physics. By Prof. Oliver		
Lodge, F. R. S.		1
Babylonian Cosmology		2
Our Book Shelf:—		
Dickie: "Elements of Physiography"		3
Powell: "Seventh Annual Report of the Bureau of Ethnology to the Secretary of the Smithsonian Institution, 1885-86"		3
Letters to the Editor:—		
A Remarkable Rainfall.—Clement L. Wragge		3
The Cold Wave at Hongkong, January 1893—its After- Effects.—Sydney B. J. Skertchly		3
The April Meteors.—W. F. Denning		5
Smithsonian Institution Documents.—Prof. Cleveland Abbe		6
The Genesis of Nova Aurigæ. By Richard A. Gregory		
The Royal Society Selected Candidates		8
No es		11
Our Astronomical Column:—		
South Polar Cap of Mars		15
The Brightness of the Major and Minor Planets		15
Meteor Showers		15
Astronomy Popularised in America		15
Optical Tests for Objectives		16
Photograph of a Bolid		16
Geographical Notes		
The Use of History in Teaching Mathematics. By G. Heppel		
Fogs and Horticulture. By Prof. F. W. Oliver		16
University and Educational Intelligence		13
Scientific Serial		20
Societies and Academies		21
Books, Pamphlets, and Serials Received		24
Diary of Societies		24

図1 1893年5月4日号『ネイチャー』目次

のもある)は性格がまちまちで、ロッキヤーが天文学にまつわる連載をしたり、新しい科学機器の解説が出たりと、雑多な内容としかいようがない。ただし、署名記事のかたちをとっているものも、そのうちのかかなりの部分は、学会や研究会での報告を編集部が要約したものである。なお、以下では^①^②^④のものを記事、^③のものを論文と呼ぶことにする。

では、五月四日号を詳しく見ていこう^④。まず、^①の冒頭にはリヴァプール大学教授で王立協会会員でもあったオリヴァ・ロッジによる「あるアメリカの物理学の教科書」(ペンシルヴェニア大学のジョー

ジ・F・バーカー著『物理学上級コース』の紹介)が置かれ、つづいて無署名の「バビロニアのコスモロジー」(シュトラースブルクのP・ジェンセン著『バビロニアの宇宙観』の紹介。*当時はドイツ領)が配されている。いずれも入門的な科学書を平易に解説した内容である。

つづいて三頁に②書評欄があり、ディッキ『自然地理学の諸要素』パウエル『スミソニアン協会長への民族学部第七次年報告一八八五～八六年』の二つが取り上げられている。いずれも無署名である。

同じ三頁の右段後半から始まる③投稿欄には四篇が出ており、クレメント・L・ラッジ「豪雨」、シドニー・B・J・スカーチリー「一八九三年春の香港の寒波、その影響」、W・F・デニング「四月の流星」、クリーヴランド・アビー「スミソニアン協会文書」と並んでいる。ラッジはウスターシャ出身の著名な気象学者で、当時はオーストラリアのクイーンズランド植民地の気象官を務めていた。この論文もブリズベンから投稿されている。スカーチリーはレスターシャ出身の植物学者・地理学者で、香港西医書院の植物学教授を務めており、孫文を教えたことでも知られる。デニングはサマセット出身のアマチュア天文学者で、膨大な数の彗星を発見したことで著名である。アビーはニューヨーク出身の気象学者で、当時はコロンビア大学の気象学教授であった。ワシントンからの投稿である。この号だけを見ると、気象学関連の論文が多いが、別に特集が組まれていたわけではなく、気象学関連の論文や記事はこの時代の『ネイチャー』を代表するコンテンツであり、投稿も多かったのである⁽⁵⁾。なお、投稿欄の冒頭には「編集部は投稿者の示す意見には責任を負わない……」と注記されており、逆に言

えば、その他の記事には何らかのレベルで編集部の企図と責任があるということだろう。

そして六頁から④が始まり、まずリチャード・A・グレゴリーによる「ぎよしゃ座の新星の起源」という三頁弱におよぶ長い記事がある。八頁からは「王立協会の候補者選出」として一五人の新人会員候補のプロフィールが並べられ、アルフレッド・ラッセル・ウォレスの名も見える。次いで一一頁からB・ノートとなり、人事、公開レクチャー、出版、国内外の雑誌や新聞からの引用、調査で発見された生物一覧、植物園に新たに植えられた花々などの話題が詰め込まれている。一五頁からはC・天文学コラムが始まり、「火星の南極冠」「大小の惑星の光度」など六つの短文が出ている。実際の観測者のために位置情報や数字が示され、新しい光学機器をテストした報告などもふくまれる。つづいてD・地理学ノートがあり、新聞記事の引用、ナンセンの探検についての情報などが並んでいる。そのあとにG・ヘッペル「数学教育における歴史の利用」(幾何学教育改良協会で発表された内容の要約)とF・W・オリヴァ「霧と作物」(王立園芸協会で発表された内容の一部)が挟み込まれる。こうした要約的な記事はある号とない号があり、場所もまちまちである。そしてE・大学および研究機関人事ほかでは、ケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジのリチャード・ペンドルバリーが数学講師に再任されたこと、数学のスミス・プライズの受賞者が決まったことなどが出ている。F・科学誌では諸誌からの引用と紹介がなされる。G・協会と学会では、王立協会やリンネ協会、さらにはパリの科学アカデミーでの報告について紹介され、かな

り詳しいものと簡潔なものが混じっている。H・寄贈された書籍、パンフレット、雑誌には、タイトル一覧が並べられている。I・各協会の日ごよみは、五月四日からの一週間にわたる講演等の一覧である。率直に言えば、④のうち、B・ノート、E・大学および研究機関人事ほか、F・科学誌、G・協会と学会には厳密な違いがあるわけではないように感じる。

分量で見ると、①が二頁半弱、②が半頁弱、③が三頁、④が一九頁弱となっており、④が大部分を占めていることがわかる。この傾向は他の号にも共通する。④のなかでの各項の分量は号による変動が大きい。

投稿者および読者は三層が想定される。すなわち、大学等の研究機関に籍を置く専門の科学者、アマチュアとして活動している科学者、科学的な活動を行っていない一般読者である。そして、①②は一般読者向けの記事、③が専門の科学者／アマチュアによる最新の研究や観測結果の報告、④には一般読者と専門の科学者への情報が混在している。④の部分からは、週刊誌として最新の情報をまとめて伝える役割が読み取れる。

『ネイチャー』第四八巻の投稿欄

つづいて第四八巻の二六週分各号の投稿欄における掲載数および、注目すべき論文について示していこう。イニシャルのみ、ないしはペンネームでの投稿についても指摘する。

五月四日号は前述のように四篇である。五月一日号は九篇で、イニシャルのみのL・C・Mなる投稿者による「医学生物学」がある。五月一八日号は五篇、五月二五日号は一〇篇、六月一日号は七篇、六月八日号は七篇。六月一五日号は五篇で、F・H・P・Cなるイニシャルのみの投稿者がある。六月二二日号は六篇で、オステン＝サッケンが「特徴的な蠅のうじ」を寄せている。六月二九日号は五篇。七月六日号は八篇で、フランシス・ゴルトンが指紋を扱った「アイデンティフィケーション」が出ている。七月一三日号は六篇で、インドのラホール（現パキスタン）から「奇妙な叢」を投稿しているカンハイヤラルの名が見える。七月二〇日号は六篇、七月二七日号は七篇、八月三日号は七篇、八月一〇日号は六篇。八月一七日号は一四篇で、イニシャルのみの投稿者が、A・B・MとM・A・Bの二人いるほか、「通知の書き手」なるペンネームの人物も確認される。八月二四日号は七篇。八月三十一日号は二三篇で、カンハイヤラルが「数学者へのアピール」を寄せ、そのほか、「レビュー」なる投稿者（編集者のようである）もいる。九月七日号は七篇、九月一四日号は四篇。九月二二日号は三篇でアッシリア人考古学者のホルムズド・ラッサムが「アッシリア遺物の盗難について」を書いている。九月二八日号は六篇。一〇月五日号は六篇でラッサムが再び同題の論文を寄せている。一〇月一二日号は六篇で、イニシャルのみのL・C・Mがいるほか、熊楠の二本目の「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」が出ている。一〇月一九日号は四篇で、イニシャルのみのM・D・Hがいる。一〇月二六日号は八篇。

合計で一七六篇となる。号ごとでは最少が九月二一日号の三篇。最多は八月一七日号の一四篇で、この週は投稿欄が六頁半におよび、そのため④の彙報欄が圧縮され、抜けている項目もある。各号での掲載本数ないしスペースにはとくにきまりはなかったことがわかる。二六週を平均すると、約六・八篇となる。なお、ほとんどは単著論文で、共著は二篇にとどまる。

つづいて、イニシャル／ペンネームについて見ておきたい。イニシャルのみが六篇、「通知の書き手」と「レビューア」が各一篇の計八篇で、総数の約四・五パーセントとなる。彼らがアマチュアだったのか、専門家が名を隠したのかは不明だが、少なくとも自分の名をはっきりと出している投稿者たちとは、意識の違いを読み取ることができるだろう。補足すれば、イニシャルのみの投稿は、①②④にも少なくない。六月二九日号巻頭の「電子力学」はP・Dが担当し、一〇月五日号の書評欄ではGという人物がエドワーズ『初心者への微分学』を取り上げ、八月二四日号の④の「雑種植物の微少構造」はF・E・Wによるといった具合だ。現在の科学誌ではありえないだろうが、一九世紀以前の雑誌、文芸、新聞の世界では珍しいことでなく、ほかに『N&Q』でもしばしば見られた。投稿欄への投稿者のほうが自分の名を売る意識が高かったたであろうことは推察されるが、編集部がこの部分には責任を負わないと注記しているにも関わらず、イニシャルやペンネームでの投稿・掲載を認めていた点には注意する必要があるだろう⁽⁶⁾。同じ投稿者が複数回の投稿をしているケースはけっして少なくない。第四八巻の最多投稿者はウォレスで、五月二一日号「F・W・フォー

ブズ氏のチャタム諸島での発見」、六月二九日号の「アルプスの湖における氷河理論」、七月二〇日号「獲得形質の非遺伝性」、八月二四日号「胎児期の性格への影響」および「南アフリカの動物の生態」、一〇月一九日号「ブラジルの氷河作用と推定されるもの」と六篇にのぼる。このほか、ニュージールランドで出版されたチャールズ・ウィリアム・バーネル著『動物の知性』を扱った五月二五日号の巻頭記事「理性対本能」も担当している。

ほかにも、熊楠が一〇月五日号「東洋の星座」と一〇月二一日号と「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」と二週連続で出ているほか、J・エドマンド・クラークが五月一八日号「日中の流星」、五月一八日」と五月二五日号「天井の煤形」を寄せるなど、枚挙にいとまがない。また、五月四日号で「豪雨」を書いたラッジが、五月一八日号の彙報欄に「動力の基礎公理」を出し、つづいて六月一日号の投稿欄にも「動力の基礎公理」を出すといったケースもある。各欄がこのように密接なつながりを持ち、展開していった事実は見落とすことができない。

質疑応答と議論

熊楠の「東洋の星座」は、ロッキヤーがさかんに古天文学の記事を掲載していたのに触発されたM・A・Bが、古代の星座に関する質問を出し、まずロッキヤーの回答が出たのにつづいて、補完的な論文として掲載されるという、複雑にからまりあった関係性のなかにあつ

た^⑦が、このような質疑応答、議論といったものは当時の『ネイチャー』において一般的だったのだろうか。

まずは「海辺で洗われていた無数の昆虫」である。八月一七日号にソフィー・クロボトキンが寄せたもので、ケントの海岸の波打ち際に何マイルにも渡って無数の羽蟻が流れているのを見かけたが、投稿者のどなたか情報をくれないかというのであった（投稿の日付は八月一〇日）。なお、ピョートル・クロボトキンの夫人である。これには八月二四日号ですぐさま回答が出て、オズワルド・H・ラターが、八月七日に近くのサリーで北西からの強風があり、羽蟻が海上に吹き飛ばされてしまい、その死骸が海岸に流れ着いたのだらうと述べた。ラターは蜂についての著作があるアマチュアの昆虫学者であった。質問と応答が見事に噛み合い、満足すべき情報交換が行われていることがわかる。

それからもうひとつ、「アッシリア遺物の盗難」を見ていきたい。現在の『ネイチャー』では分野外となる考古学に関するもので、なおかつ投稿者にアッシリア人がふくまれるという注目すべき議論である。

発端となったのは、八月一〇日号の彙報欄に無署名の記事（おそらく編集部による）として出た「アッシリア遺物の盗難」であった。一頁半ほどの長めの記事で、アッシリア学者のラッサムが、大英博物館のW・バッジを相手取って名誉毀損の裁判を起こしたことを報じている。ラッサムはモースル生まれでキリスト教徒のアッシリア人で、一八七〇～八〇年代にA・H・レヤードの助手としてバビロニア遺跡

の発掘に携わり、マルドゥク神殿、太陽の神殿などで貴重な遺物を発見した。そのうちキュロス・シリンダーなど多くが大英博物館に収められたのだが、実はラッサムは発掘品のうち優れたものは縁者を使ってこっそりと国外へ運び出して金に換え、残りの「がらくた」のみを大英博物館に高い値段で売りつけたのだとバッジが発表したため、怒ったラッサムが訴えたのであった。この八月一〇日号の記事がどちらかというとバッジに同情的な調子だったためか、ラッサムは九月二一日号の投稿欄に長文の論文を寄せ、そのような事実はないと反論し、つづけて一〇月五日号にも再び抗議の論文を出している。しかし、一〇月二六日号ではユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのW・M・フリンダー・スーパトリが「遺物の盗難」と微妙にタイトルを変えて論文を出し、エジプトなど国外の発掘現場では現地人による盗難が頻繁に起こっており、何らかの対抗措置を考えないかぎり被害はなくならないと述べている。ともかく裁判はラッサムの勝訴に終わり、現在でもラッサムの側に不正行為はなかったと考えられている。こちらは質疑応答ではないものの、このような議論は当時の『ネイチャー』で珍しくなかった。

ちなみに考古学や人類学の論文は、多くはないものの何篇か見え、第四八巻ではこのほかにも一〇月五日号に出たアメリカの民族学者オーティス・T・メイソン「ニューカレドニアの製陶」などが挙げられる。

次に補足・修正について確認しよう。熊楠が自分自身の論文に対して、しばしば短い補足や修正を投稿したのはよく知られているが、こ

れも当時の『ネイチャー』においてふつうに見られることであった。前述のラッサムがまさにそうであり、それ以外にも八月三日号でJ・J・ウォーカーが、前週の彙報欄で取り上げられた自分の報告の要約への「訂正」を出しているようなケースがある。

ただ、『N&Q』の場合には各論文のタイトル部分に応答・継続・補足関係のレファレンスが付くのだが、『ネイチャー』ではそういったことがなく、本文中で先行する投稿が示されるのみである。なおかつ熊楠の「東洋の星座」の場合のようにタイトルが変更されることがしばしばあるため、議論の道筋をたどるのはかなり厄介となる。これは現在の私たちだけでなく、当時の読者にとってもそうだったであろう。また、各号に約五〇篇が載る『N&Q』にくらべて、『ネイチャー』の投稿欄には各号約六・八篇しか出ておらず、投稿自体が少ない。そうした点からすると、『N&Q』ほどは情報交換誌の性格が強くなかったと考えられる。

反応の早さという点は『N&Q』と変わらず、たとえば前述のウォレスの一〇月一九日号「ブラジルの氷河作用と推定されるもの」に対しては、早くも翌一〇月二六日号でヘンリー・H・ハワース「ブラジルの氷河作用」とデイヴィッド・ウィルソン・バーカー「ブラジルの氷河作用―星々のきらめき」が出ている。ひとつの投稿に対して、複数人から応答が出て、議論が複雑に展開していく点も同様である。別稿で指摘したように、週刊誌ならではのスピードといえよう⁽⁸⁾。

日本や中国への関心

『ネイチャー』第四八巻には、日本や中国、インドに関する話題がいくつか確認できる。それらを見ることで、「東洋の星座」の位置づけに迫れるだろう。

まずは日本だが、投稿欄には日本関連の論文はない。記事は八件で、いずれも彙報欄に出ている。署名記事はペリーのもののみで、ほかは新聞や雑誌などからの引用となっている。まず六月八日号に、ジョン・ペリーによる「日本の地震学」が出ている。工部大学校で土木学と機械学を担当した技術者だが、ここでは一八九一年に起きた濃尾地震について述べ、結びでは日本地震学の父とされるジョン・ミルンへの募金も呼びかけている。九月二一日号のB・ノートには、日本協会の会合が二七日に開かれ、ミルンが「日本における噴火、地震の発生に関する短報」を報告する予定だとある。ミルンは前年に、同じくお雇い外国人写真家であったウイリアム・K・バートンとの共著『日本の地震』で濃尾地震について発表しており、このころちょうどイギリスに帰国中だったため、講演会が企画されたのだろう。地震や噴火に関する記事は多く、六月二二日号のノート冒頭に、『タイムズ』から磐梯山の一八八八年の噴火について引かれ、八月二四日号の同欄にも『タイムズ』の続報が紹介されている。さらに同日の同欄には、『東京帝國大学紀要 理科』五巻六号に出た小藤文次郎の濃尾地震に関する論文が紹介されており、一〇月一二日号のD・地理学ノートにも同じ論文が引かれている。一〇月二六日号のノートには、E・ナウマンの論

文が取り上げられ、フォッサ・マグナについて詳しく扱われている。このほか、八月二四日号のノートに、アメリカのナショナル・ミュージウムから出版されたR・ヒッチコックの『日本の古墳』が紹介されている。この頁には、『タイムズ』、小藤、ヒッチコックと日本関連の記事が三つも並んでいることになる。

日本に関する記事からは、地質学、なかでも地震と噴火に関する関心の高さが読み取れる。濃尾地震と磐梯山噴火という二つの大きな出来事の影響はもちろん、ミルン、ペリー、バートンらイギリス人が関わっていたことで、再三の記事につながったのだろう。そのなかで小藤ら日本人の論文も紹介されていたことは注目される。

中国関連の論文は四篇、記事は二篇である。投稿欄から見ていくと、五月四日号にスカーチー「一八九三年春の香港の寒波、その影響」があり、五月二五日号にチャールズ・A・ノーコックの「北シナ海の気象状態」が出ている。ノーコックは海軍のカロライン号に乗船していた人物で、香港から投稿している。なお、北シナ海とは、現在の東シナ海付近に相当するようだ。そして、熊楠の「東洋の星座」と「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」（一〇月二二日号）となる。記事は、八月一〇日号のノートに上海近郊で気象学協会が設立されたことが出ているのと、八月一七日号のノートで『ハンザ』から中国近海の台風について紹介されたものだ。

数で言えば、アジア関連ではインドがもっとも多く、まず論文は五篇を数える。五月二七日号のE・ダグラス・アーチボルド「二四時間での最多雨量」でインドのチラプンジの例が挙げられ、六月二二日号

には同じくアーチボルドによる「セイロンにおける大小のモンスーン」が出ている。それから前述のカンハイヤラルによる、七月一三日号「奇妙な霰」、八月三一日号「数学者へのアピール」があり、これについては後述する。そして最後が熊楠「東洋の星座」となる。

記事は一〇篇が確認され、五月四日号のノートで『インド内外科雑誌』の創刊が話題に挙げられたのに始まり、五月一日号のノートでインドの産業についての報告書が紹介され、五月二五日号のノートでは『バイオニア・メール』からコブラに関する迷信が取り上げられる。コブラを一匹でも殺すと仲間のコブラたちが集まってきて復讐するというもので、実際にイルダートンというイギリス軍人が咬み殺されたとある。七月二七日号のノートでは前述の「二四時間での最多雨量」に対して、『インディアン・プランターズ・ガゼット』からデラ・ドゥーンでのさらなる豪雨を報じた記事が引用されている。八月一〇日号では、無署名記事「ブルーチスターンの地震」で一八九二年二月に起きた大地震が写真付きで紹介され、ノートにはカルカッタの園芸雑誌から、インドへの日本からの桑の導入が失敗したという報告が取り上げられている。八月三一日号のノートには、古代インドから地中海世界へ琥珀が輸出されていたのではないかとドイツの学会報告が紹介され、九月二一日号のノートでは『セイロン・オブザーヴァー』からコロンボに動物園ができた件、同じ頁に一八九二年度のインド雨量についての報告も引用されている。そして、一〇月一九日号に、フランス・ゴールトンの「インド軍における指紋」の記事が出ている。なお、索引ではインドとセイロンが分けられているが、本稿では便宜

上、ひとつにまとめた。

これ以外にもアジアの話題としては、五月四日号のノートにビルマ産の宝石についての記事があるなど、いくつか確認できる。

さて、以上からすると、日本が地震と噴火、中国が気象に偏っていたのに対して、インドの話題の多様性が指摘できるだろう。イギリス支配下にあったこと、イギリス人による報告が本国にもたらされたこと、多数の英文の新聞や雑誌が発行されていたことなどが原因と考えられる。

ラホールのカンハイヤラル

つづいて、カンハイヤラルについて見ておこう。ラホールから投稿している人物で、文章からすると現地のインド人と判断されるが、残念ながら詳細は判明していない。『ネイチャー』への投稿もここで取り上げる二篇のみである。

七月一三日号に出た「奇妙な霰」は、友人から聞いた話として、数日前にペシヤワールのダデュザイという村で嵐があり、霰が降った。しかし、まったく冷たくなく、食べると砂糖の味がした。また、特殊な細長い結晶をしており、砕けやすかったという。なお、投稿の日付は六月二〇日となっており、インドからの投稿が三週間あまりで掲載されていることがわかる。

八月三十一日号の「数学者へのアピール」はかなり長文のもので、自身が長年にわたって『ラーマヤナ』を研究してきたことから語り始

め、従来の年代考証の不正確さに苦言を呈す。そしてエジプト学者たちが彗星や日食の記録をもとにした「天文学的方法」で、ファラオたちに関する年代特定に成功している例を挙げ、古代インド史にももっと「数学的な天文学」をもちこむべきだと主張する。そして、たとえばラーマ王子が誕生したときの月、太陽、水星・土星の位置は明記されているのだから、専門の心得のある数学者に計算してほしいと述べるのである。こちらの投稿の日付は八月八日である。

カンハイヤラルの二篇の論文は、当時の『ネイチャー』や、アジアからの投稿、熊楠の「東洋の星座」について考えるにあたって、きわめて示唆的だと思われる。「変わった霰」はちょっと信じがたいような内容で、しかも伝聞である。一八九三年とはいえ、『ネイチャー』にこのような論文が出るとは驚きだが、気象に関する現地からの珍しい報告ということで許容されたのだろうか。一方の「数学者へのアピール」は、「東洋の星座」ときわめて位置づけが近い。おそらくロッキヤーの影響によるであろう古天文学の論文がアジアから投稿されていたのである。また、『ラーマヤナ』は古くからヨーロッパで研究され、すでにこのとき英訳もあったとはいえ、イギリス人には扱いづらい東洋文学の資料であった。なおかつ、カンハイヤラルは自身では計算しておらず、アピールのみに留まっている点からすると、熊楠の場合と同様に、天文学の専門家ではなかったと考えられる。ロッキヤーは、さまざまな場所で、こうした問題意識を誘発していたのである。

おわりに

以上、第四八巻を詳細に見ることで、熊楠がデビューしたころの『ネイチャー』についていくつかの理解に至れたであろう。誌面構成からは、一般読者向けのコンテンツの多さ、編集部記事が大部分を占めたこと、そしてそのなかに投稿欄が存在した点が確認された。投稿には専門の科学者と、アマチュアによるものとが混在している。ただし、ここというアマチュアには、大学等の研究職に就いてはいないものの、専門家なみの知識や技術を備えていた人物もあり、単純に一線が引けるわけではない。むしろ、そうした区分の難しさこそがイギリスの学問世界の特徴なのだろう。本稿で取り上げた投稿者たちには現代まで名の残る一流の科学者が多いが、かならずしも大学教員ばかりではなく、何人ものアマチュアがふくまれている。

投稿欄の掲載論文は各号約六・八篇とあまり多くないが、イギリス国内外の投稿者によって質疑応答や議論の応酬が行われており、また同じ人物が繰り返し投稿することもふつうであった。これは熊楠の『ネイチャー』への投稿が、けっして彼だけの特異なやり方ではなかったことを教えてくれる。なおかつ、そうした議論は投稿欄にのみ留まるものではなく、しばしば編集部記事とも関連していた。とくにロッキヤーによる天文学関連の記事は読者を触発し、投稿を促したと考えられる。また熊楠が寄せた諸論文は、現在の『ネイチャー』からすると違和感を覚えるようなものも多いが、ラッサムらの投稿や、補足・訂正の多さからわかるように、この時代にはけっして場違いではな

かった。むしろ、熊楠のスタイルは『ネイチャー』にならったものだったというべきなのかもしれない。

誌面におけるアジアについても確認した。日本に関しては多数の記事が出ており、とくに地震と噴火については詳細な情報が伝わり、日本人研究者の論文まで紹介されている。そうした地質学の最新の知見と、熊楠の古代に関する論文の両者が併行して受け入れられていたのである。また、インドからの投稿者であるカンハイヤラルの「数学者へのアピール」は「東洋の星座」ときわめて近い位置づけにあり、熊楠が孤立した単独の存在ではなかったことを示している。各地に熊楠的な人間がいたのである。

一八九三年の『ネイチャー』がこのような空間であったからこそ、熊楠は「東洋の星座」を投稿することを思いつき、そして見事に掲載されたのであった。

注

(1) 「タイムズ」とあるのは熊楠の記憶違いで、『マンチェスター・タイムズ』に別の論文が転載されたのと混乱していると思われる。松居竜五「英國の新聞記事から見る南方熊楠のロンドン時代」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』一五号、二〇一三年、一五六頁。

(2) 拙稿「フーツ・アンド・クエリーズ」誌と大辞典の時代―オックスフォード英語大辞典、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠『歴史文化社会論講座紀要』八巻、二〇一一年。――『フーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文の中のアジア」『南

方熊楠とアジア」勉強出版、二〇一一年。

・――「まえがき」『南方熊楠英文論文「ノーツアンドクエリーズ」誌篇』飯倉照平監訳、松居竜五・田村義也・志村真幸・中西須美・南條竹則・前島志保訳、集英社、二〇一四年。

- (3) ポピュラー・サイエンスと熊楠の関係については、橋爪博幸「南方熊楠と『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』」『熊楠研究』九号、二〇一五年を参照のこと。

- (4) 熊楠の「東洋の星座」が掲載された一〇月五日号については、拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』における古天文学―「東洋の星座」投稿をめぐって」『異端者たちのイギリス』共和国、二〇一六年春出版予定で分析している。

- (5) 拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』における古天文学―「東洋の星座」投稿をめぐって」を参照のこと。

- (6) 熊楠ものに『N&Q』への投稿で、オソ・イ・アルカンフォラーダというペンネームを用いた時期がある。オソはスペイン語で「熊」、アルカンフォラーダは「楠」を意味する。使用した理由はハッキリしていない。

- (7) 拙稿「南方熊楠と「東洋の星座」」を参照のこと。

- (8) 同。